

宍道町ふるさと文庫18

# 宍道町に初めてお寺が建てられた頃

謎のお寺?堤平遺跡を探る



# 目 次

1. 発掘された謎の遺跡	
(1) はじめに .....	1
(2) 堤平遺跡の発見 .....	3
2. 古代の寺	
(1) 仏教伝来 .....	15
3. 出雲地方の古代寺院	
(1) 『出雲国風土記』の教皇寺と新造院.....	18
(2) 発掘された新造院 .....	19
(3) 島根の古代寺院 .....	21
(4) 風土記の時代の宍道町 .....	23
(5) 古墳時代の宍道町 .....	24
4. 新しい寺が造られる	
(1) 山林修行と山寺 .....	26
(2) 県内での瓦を使用しない仏教関係の遺跡 .....	28
(3) 萩田遺跡 .....	35
(4) まとめにかえて .....	38
おわりに .....	41



## 1. 発掘された謎の遺跡

### (1) はじめに

日本の地方に活発にお寺が建てられ始めるのは、およそ7世紀後半頃の事とされています。当時の仏教は、朝鮮半島から伝わった最新の知識であり、お寺の建築は当時最先端の巨大土木建築でした。高い基壇きだん（基礎部分）を造り、礎石を置き、太く高い柱を立て、大量の瓦を載せた建築が出現したのです。お寺の存在は現在では珍しいものではありませんが、古代においては、その巨大な建築が人々の注目を集めたことでしょう。板葺き屋根の掘建柱建物に住んでいた当時の常識からすれば、高い屋根の上に瓦を葺いた建築は、新時代の訪れを感じさせるものだったに違いありません。島根県内においても、松江市のくるみ来美廃寺の発掘調査では全国的にも珍しい三尊仏さんぞんぶつの設置痕跡が確認さ

古墳時代	飛鳥時代		奈良時代		平安時代
538(552)年	642年	685年	710年	745年	794年
仏教公伝	全国の寺46カ所	全国の寺545カ所	平城京遷都	国分寺建立の認 大仏開眼	平安京遷都
733年					
山代 <small>こ</small> 子塚古墳など大型古墳が造られる	この頃宍道町でも横穴式石室が造られる		教皇寺と新造院が建てられる	出雲国風土記 堤平遺跡の寺？が建てられる 出雲国分寺が建てられる	萩田遺跡の鍛冶集落が最盛期 高根の古代寺院が衰退に向かう

第1表 本書で、紹介する時代の略年表

れ、県内における奈良時代の仏教文化の浸透を垣間見ることになりました。それから1千数百年間に亘って、日本の仏教文化は一度も大きく廃れることなく、きわめて身近な存在として現在に至っています。

前出の来美廃寺や出雲国分寺跡など奈良時代に栄えた寺院遺跡は、県内でもそこかしこで知られていますが、その後の平安時代の寺については、実はあまり判っていません。遺跡として知られる奈良時代前半までに建てられた寺院遺跡の多くが、平安時代に廃絶してしまうことが発掘調査で判っています。ただ、奈良時代の仏教は「鎮護<sup>ちんごこっか</sup>国家」、国を守るためと言う意識が強く、一般の人々にとっては、むしろ平安時代頃からが、仏教を身近な存在と認識できるようになったのではと考えられます。つまり、より多くの寺が建てられるのは、平安時代前後と想像されるのですが、実は遺跡として確認できるものがほとんどなかったのです。

1994年に安来道路建設に伴う発掘調査で、尾根筋にある小さな掘建柱建物跡から仏教に関わる遺物が多く出土しました。奈良時代前半以前に建てられた瓦を葺いた巨大な建築物ではなく、小さなお堂のような施設の存在が少しずつ知られるようになってきたのです。宍道町白石（才）で発見された堤平遺跡もそうしたお寺（？）の一つであったと同時に、宍道町域で最初に建てられたお寺（？）です。本書では堤平遺跡を中心に、奈良時代後半～平安時代の仏教の様相と当時の宍道町、鳥根県のような様子を見てみたいと思います。

## (2) 堤平遺跡の発見

1998年4月、現在の山陰道宍道バスストップ周辺の発掘調査が始まりました。前年に行われた範囲確認調査では、奈良時代（今から約1,200年前）の土器が出土しており、奈良時代の集落であろうという予想で調査を開始したのですが……。調査が進むにつれ、通常の集落遺跡とは違うものが出土し始めました。例えば、口にススの付いた小さな皿、底が尖り気味になった半球形の鉢などです。

堤平遺跡は、宍道町大字白石（才）の東部家畜市場から北東に下ったところにあります。遺跡付近の標高は約40mで、周囲を山に囲まれ、北西方向に伸びる小さな谷からしか周囲を臨むことは出来ません。奈良時代の宍道には駅家（うまや：人馬によって情報を伝達するため



堤平遺跡全景

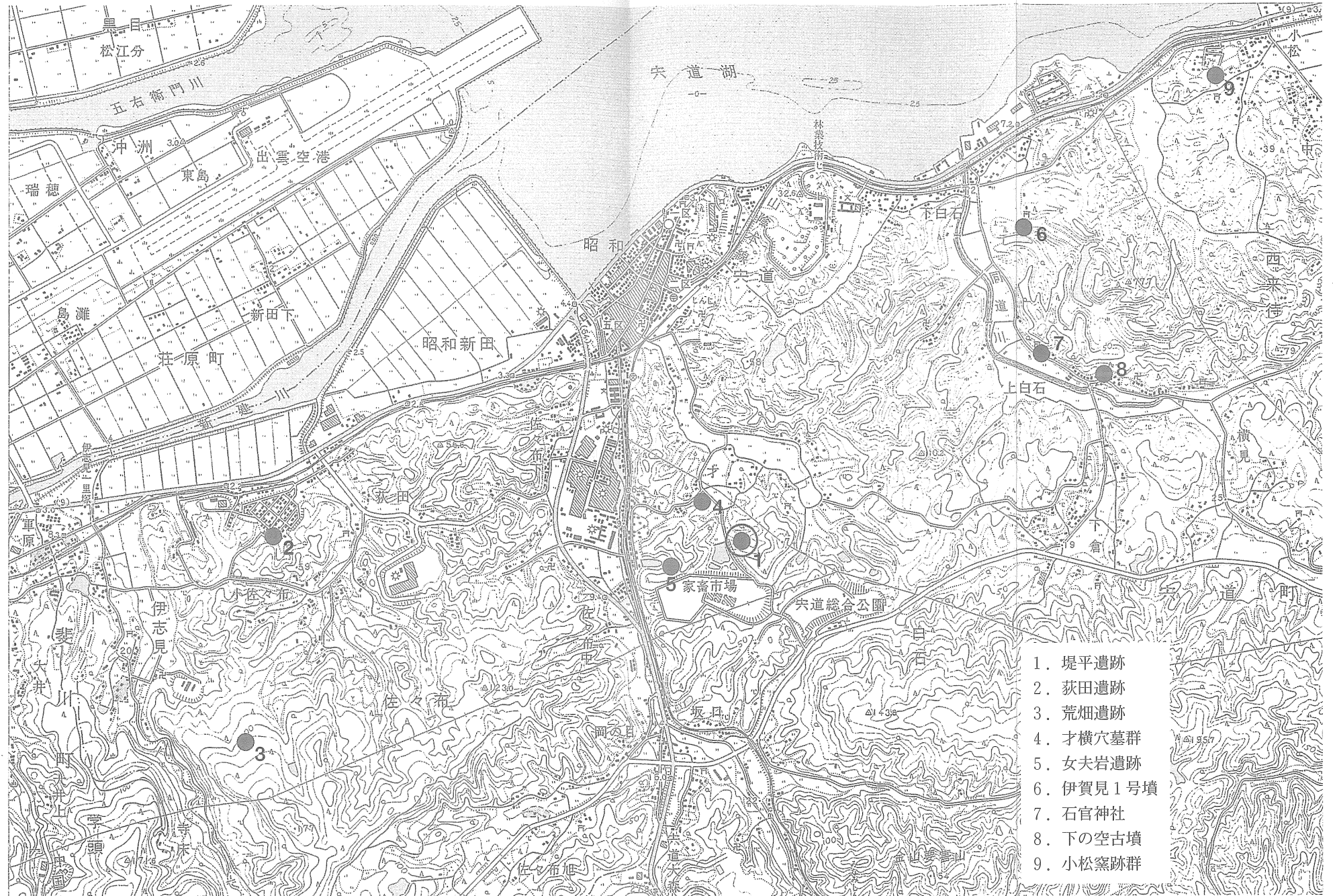
の役所) が置かれ、情報伝達や交通の要衝として多くの人々が行き交ったと思われませんが、堤平遺跡に造られた施設はそのすぐ近くに位置しながら、そうした喧噪を遮ろうとするかのような場所に造られていたのです。

発見された遺跡は、岩山の斜面を東西約50m、南北約30mに亘って平らに造成したもので、特殊な構造の建物跡や岩盤を削りぬいた穴が見つかりました。発見された建物跡群の内、中心的な建物は布掘り建物と呼ばれる特殊なもので、柱を建てるのに、1本1本の柱穴を別々に掘るのではなく、建物を囲むように溝を掘り、その溝の中に複数の柱を建てる構造のものです。太く、大きな柱を立て、屋根の高い建物を建てたと考えられます。また遺跡中程には、岩に36cm×24cmの穴



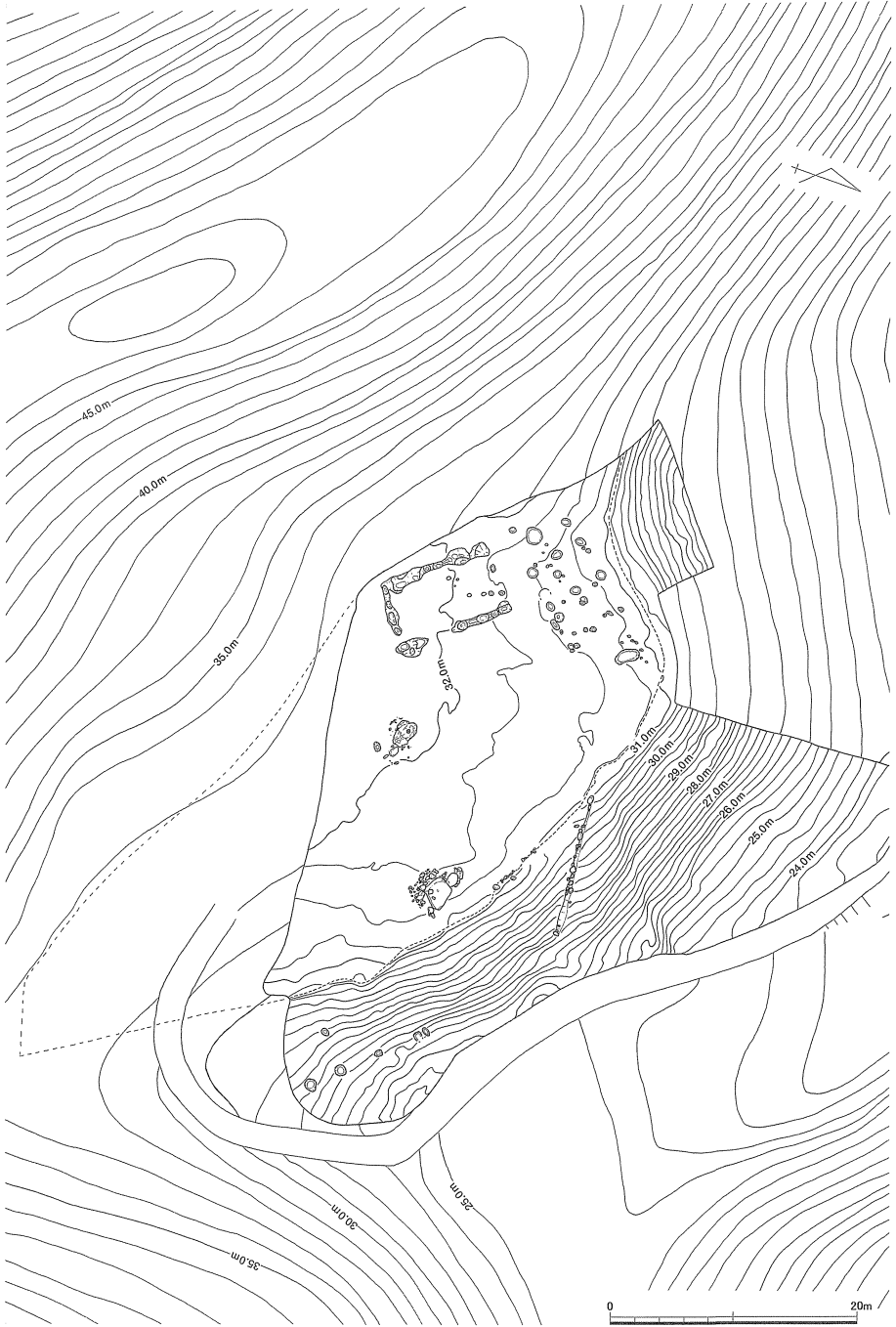
布掘り建物跡



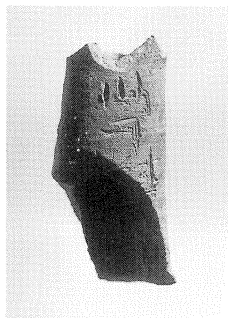


第1図 堤平遺跡の位置 (1:25,000)





第2図 堤平遺跡調査区配置図 (S=1:600)



へら書き土器「□千継」

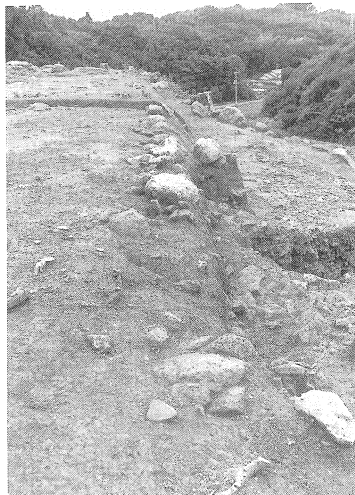
を開け、石を切って作った蓋を被せた遺構（掘り込みのある岩2）も見つかりました。それ以外にも、岩盤を削りぬいた大小さまざまな柱穴があり、多くの建物を建てていたことが判りました。遺跡北側の谷には、ここで使用された大量の土器が投げ捨てられており、煮炊きや食器として使用した土器、

前出のススの付いた皿、半球形の鉢が多く含まれていました。また、建物群の一面に掘られた穴の中からは、銅製の容器の破片が発見されました。この時代、銅やサハリ（銅と錫の合金）と言った金属で造られる容器は仏具が多く、堤平遺跡で発見された銅製容器の破片も仏具であったと考えられるのです。この銅製容器が見つかった事によって、それまでよく判らなかつた特殊な土器も、次第にその用途が判るようになってきました。ススの付いた小さな皿は、日中でも薄暗い堂内を照らす燈明皿（油を燃やす照明具）、半球形の鉢は僧侶の持物である鉄鉢形土器（金属製の鉢を模した土器）でした。出土した遺物には、お寺で使われるものや、僧侶の持物が多く含まれていることが判ってきたのです。

古代の寺跡は、瓦を葺いた巨大建築が一般に知られていますが、近年では奈良時代の後半には、瓦を葺かない小さな寺（のような施設）も造られ始めたことが解ってきています。堤平遺跡に建てられた施設は、まさにそうした寺（？）跡だったと考えられます。



第3図 堤平遺跡遺構配置図



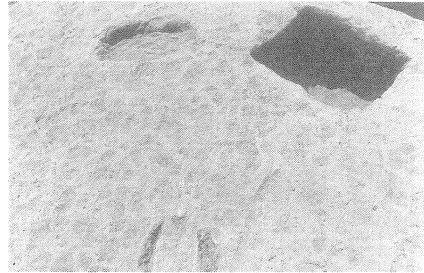
平坦面の周囲

発掘調査で判った堤平遺跡は建物跡2棟以上と通路や多くの柱を立てた穴からなります。北西側から続く谷筋を堤平遺跡に入ってくると、遺跡東側から斜めに上がる通路に当たります。その通路の脇や平坦面の周囲には石が並べ置かれて、崩れないようにしてありました。平坦面に上がりきると、門があったのではと想像されますが、発掘調査では確認できませんでした。この

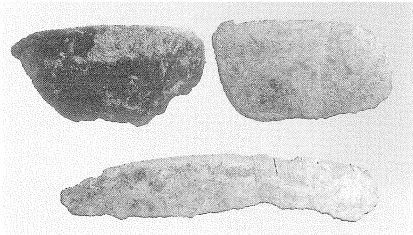


掘り込みのある岩2

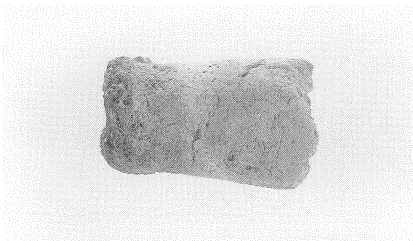
付近から平坦面の北東側は建物のない空地があり、この場所で儀式が行われたことでしょう。確認できた建物跡は西側の山沿いに見られ、北端に掘建柱建物、中央に布掘り建物が建てられています。布掘り建物付近からは出土遺物が少なく、生活臭は感じられません。おそらく仏堂の中心的建物だったことでしょう。北側の掘建柱建物周辺からは、大量の土器の他、金属生産に関わる遺物（羽口・鍛冶滓<sup>かじ</sup>など）が出土し、火を焚いた痕跡なども多く見つかったことから工房などの施設の存在が考えられます。この付近には更に多くの柱穴の跡が見つかっており、建物の建て替えが度々行われたものと想像されます。平坦面の南側は発掘調査が行われていないため、どんな施設があったのか判りませんが、僧の生活の場があったのでは



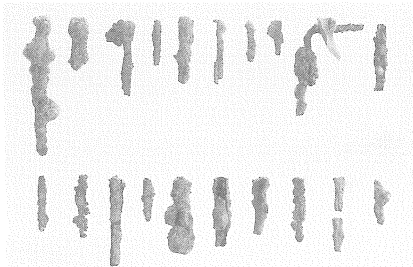
掘り込みのある岩 2



銅製の容器片



ふいごの羽口



鉄釘など

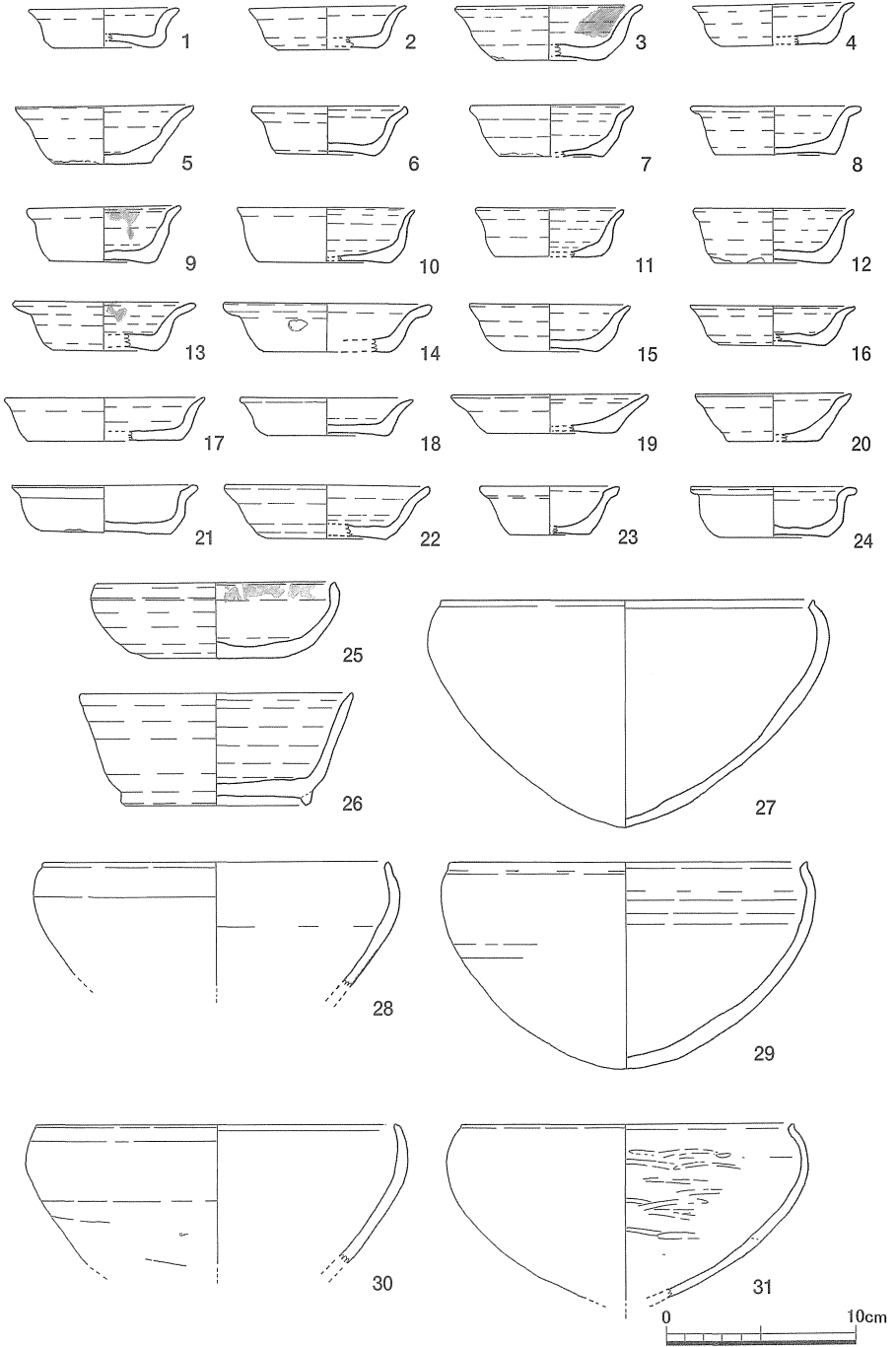
ないでしょうか。遺跡の中央では、岩盤が露出しており、岩を切り崩した工具の痕跡がそこかしこに見られます。柱を立てた丸いくぼみも多くあり、確認できなかった建物跡がまだ多くあったようです。遺跡中ほどの岩盤には、前出の蓋をされた長方形の穴が開けられています。この穴を舍利孔（しゃりこう）（釈迦の骨に見立てたものを入れる）として、小さな木造塔が建てられていたことも想像されます。

出土遺物の中でも興味深いものとしては、土器に字を彫ったものが1点（8ページ上）見られます。須恵器の壺の首の部分と考えられる小片で、最初の1文字は判別できませんが、「□千繼」と読めます。千繼は人名と考えられ、僧であったと想像されます。



堤平遺跡で出土した土器類





第4図 堤平遺跡出土土器 (S=1:4)

13ページには、堤平遺跡で出土した土器の一部を図示しています。1～24は、須恵器の灯明皿です。3・9・13など様にススの痕跡を残すものが多く見られます。25・26のように通常使われる食器類や煮炊きの道具も多く出土していますが、25の坏には、灯明に使用された痕跡が見られます。27～31は鉄鉢形土器<sup>てっぽちがたどき</sup>で、本来は金属製ですが、須恵器の技術によって作られたものです。この土器は僧の持ち物で仏教に関わることを証明できる遺物の一つです。堤平遺跡からは非常に多く出土しており、多くの僧が住んでいたことが判ります。出土した土器の形式から、堤平遺跡に建てられた仏教関係の施設は、奈良時代の中頃に成立し、平安時代にはその役割を終えたようです。

以上に見てきたように、堤平遺跡には、瓦も礎石建物ありませんが、寺と同じように仏教に関わる施設であることが判ってきました。県内での同様な遺跡は、近年になって次第に知られるようになってきましたが、堤平遺跡はその中でも規模の大きな方に含まれます。このような施設がなぜ造られるようになったのか、堤平遺跡を中心に見ていきましょう。

## 2. 古代の寺

### (1) 仏教伝来

仏教が日本に伝えられたのは今から約1,400年前の古墳時代のこととされています。西暦538年（上宮聖徳法王帝説他：日本書紀では552年）に百済国（朝鮮半島西部に有った国）の聖明王から仏像と教典が贈られました。これが仏教公伝と言われるものです。これは、国と国との正式なやりとりであって、この時初めて日本に仏教が伝わったという訳ではないと思われませんが、少なくともこの頃を大きく前後しない時期に仏教が日本に伝えられた事でしょう。公伝以前の522年に渡来した司馬達等が、飛鳥に「草堂」を営んで仏像を安置したと伝えている記録（『扶桑略記』平安時代）もありますが、「草堂」が寺を意味するものであったかどうかは判りません。その後、日本で最初に建てられる事になる本格的な寺院が飛鳥寺です。飛鳥寺の建立に際しては、百済から瓦博士・路盤博士などの専門家が派遣され、彼等の尽力により巨大な寺が建てられたのです。古代寺院の建築は、それ以前の竪穴式建物や掘建柱建物と全く違う建築だからです。

竪穴式住居や掘建柱建物と言った古墳時代以前から造られていた建物は、地面に穴を掘って柱を立てます。柱を埋めて立てるため、その柱が倒れる心配がなく、その柱の上に直に屋根を作ることが出来ます。ところがそうした建築に瓦を載せると、屋根の重みに耐えきれず、柱が沈んだり曲がったりしてしまいます。瓦を載せた建物を建てるには、

重い瓦によって地面が沈まないように、粘土や砂を突き固めて基礎工事（地業）を行います。更に根石<sup>ねいし</sup>で固めた礎石を置いてやっと柱を立てることが出来ます。礎石の上に立つ柱は、それだけでは倒れてしまいますので他の柱と桁梁で連結し、更に、重たい屋根を支えるため、組み物を使って重さを分散させる工夫を施します。それほど的高度で複雑な建築の上に、初めて瓦を載せることが出来るのです。現代の感覚で言えば、超高層ビルを建てる程の費用と技術が必要だったのではと思われます。日本書紀によれば624年には全国に46か所の寺が建てられていたという記録があります。仏教が伝えられてから約90年経って、やっとこれだけの寺が建てられたのです。

山陰地方で最も古く造営の始まった古代寺院に、鳥取県倉吉市の<sup>おおみどうはいじ</sup>大御堂廃寺があります。出土した瓦より7世紀中頃に造営が開始されていたようです。福岡県の<sup>かんぜおんじ</sup>観世音寺などと共通する特殊な<sup>がらんはいち</sup>伽藍配置を取る大御堂廃寺は、山陰地方随一の規模を誇り、山陰地方の中核寺院であったと思われます。鳥取県では、国府町の<sup>おおごんじはいじ</sup>大権寺廃寺等でも非常に古い瓦が知られており、早くから古代寺院の造営が始まったようですが、この頃に鳥根県内で造られている古代寺院は今のところ知られていません。

7世紀初めの推古天皇の頃には全国でわずか46しかなかった寺の数は、扶桑略記によれば685年に全国で545にまで増えていたとされています。

これらの古代寺院は、礎石の上に柱を立て屋根には瓦を葺いた巨大

な建築物でした。こうした巨大建築を造るには、最新の技術だけでなく莫大な財力が必要でしたし、それを造ることは一種のステータスシンボルにもなったことと思われます。現に、こうした古代寺院の多くが街道や港湾からよく見える立地に建てられており、個々の施設を見ると、見えにくい北側には土木建築ですら省略する場合があります。見せることを非常に意識して造られた古代寺院は、単に仏教寺院と言うだけでなく、有力者の権威の象徴という側面も少なからずあったことでしょう。

出雲地方に置いても、7世紀末頃から次々と古代寺院が建てられていきます。

### 3. 出雲地方の古代寺院

#### (1) 『出雲国風土記』の教昊寺と新造院

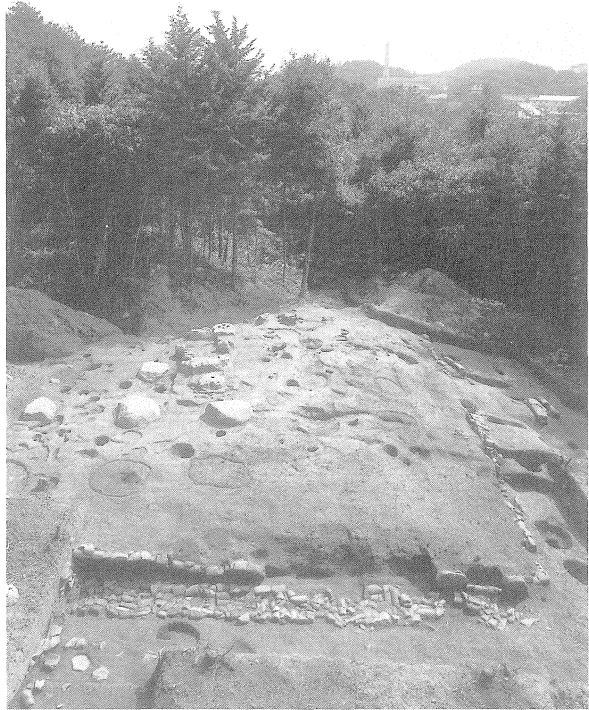
奈良時代の初め、全国にその土地を説明する地誌「風土記」の編纂が命じられました。天平五年の年記を帯びる『出雲国風土記』は全国の「風土記」の内唯一、完本として写本が伝えられています。この『出雲国風土記』は「総記」から始まり各郡毎に地名の由来やその土地にある山や川、さまざまな産物等が記されていますが、その中に「きょうこうじ教昊寺」と「しんぞういん新造院」と言う記載が見られます。

この記事にある教昊寺は、そのものズバリ寺と書かれていることから寺であることが判ります。その他の記事についても「塔あり」とか「住める僧あり」などと記されていることから、寺を指したものと考えられます。『出雲国風土記』には天平五年（733年）の年記が記されているので、おそらく奈良時代前半頃の出雲地方には11個所の古代寺院が、さらに奈良時代中頃には国分寺・国分尼寺が建てられるので、少なくとも13カ所の古代寺院があったものと思われます。「新造院」の場所がどこであったかということについては、古くから多くの研究がありますが、実際に発掘調査によって確認されている遺跡は少なく、ほとんどが古瓦散布地や礎石のある場所となっています。「風土記」には、それぞれの施設が、郡家などからどの方角の何里の距離にあるか詳細に書かれており、それによれば、宍道町内には新造院は建てられていなかったと思われます。

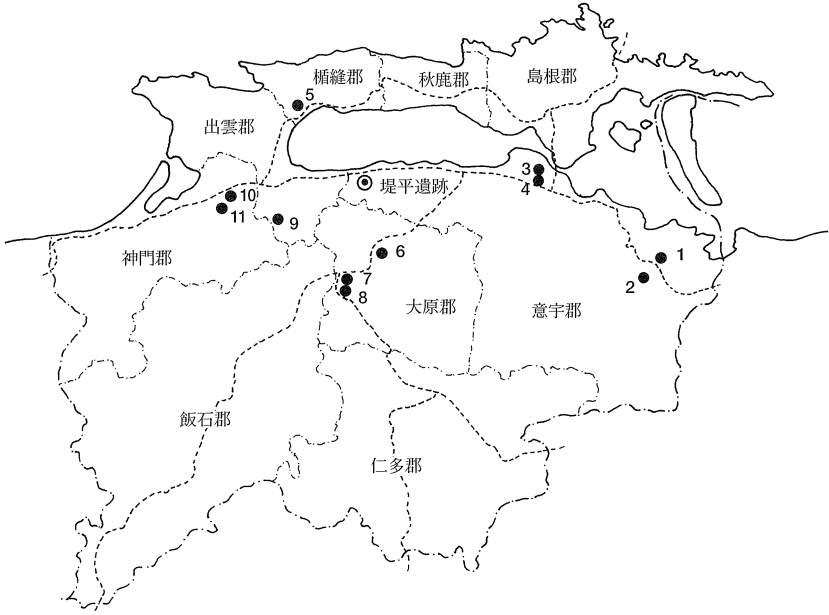


## (2) 発掘された「新造院」

島根県内の古代寺院について大規模な発掘調査が行われた例は少なく、実体の判っている古代寺院は少ないのですが、意宇郡山代郷の新造院に比定されている松江市矢田町のくるみはいじ来美廢寺は、平成8～13年に発掘調査が行われ、本尊の設置痕跡や脇侍の台座を始め、主要な建物群が明らかになっています。仏像の台座が検出された金堂を中央に置き、その両側に2つの建物を面をそろえて建てられています。さらに遺跡前面で発見された建物跡は塔跡であろうと想定されています。来美廢寺で発見された建物跡は、基壇上に礎石を置き、大量の瓦を葺いた大型建築で、その点では一般的な古代寺院と差がないのですが、金堂の両側に建物を置く変則的な配置で、金堂直後



来美廢寺第2基壇（金堂？）



第5図 『出雲国風土記』に記された教吳寺と新造院

- 意宇郡1 教吳寺。舍人郷の中にあり、郡家の正東二十五里一百二十歩なり。五層の塔を建立つ。僧有り。教吳僧が造りし所なり。散位大初位下上護国押守が祖父なり。
- 3 新造院一所、山代郷の中にあり、郡家の西北四里二百歩なり。嚴堂を建立つ。僧なし。日置君自然が造りし所なり。出雲神戶の目置君鹿麻呂が祖なり。
- 4 新造院一所、山代郷の中にあり、郡家の西北二里なり。嚴堂を建立つ。住める僧一、一級有り。飯石郡の少領出雲臣弟山が造りし所なり。
- 2 新造院一所、山國郷の中にあり。郡家の東南三十一里一百二十歩なり。三層の塔を建立つ。山國郷の人、日置部根緒が造りし所なり。
- 桶縫郡5 新造院一所、沼田郷の中にあり。嚴堂を建立つ。郡家の正西六里一百六十歩なり。大領出雲臣大田が造れる所なり。
- 出雲郡9 新造院一所、河内郷の中にあり。嚴堂を建立つ。郡家の正南一十三里一百歩なり。旧の大領日置部臣布禰が造りし所なり。今の大領佐底麻呂が祖父なり。
- 神門郡10 新造院一所、朝山郷の中にあり、郡家の正東二里六十歩なり。嚴堂を建立つ。神門臣等が造りし所なり。
- 11 新造院一所、古志郷の中にあり。郡家の東南一里なり。刑部臣等が造りし所なり。本、嚴堂を建立つ。
- 大原郡8 新造院一所、斐伊郷の中にあり。郡家の正南一里なり。嚴堂を建立つ。僧五、一級あり。大領勝部臣轟麻呂が造りし所なり。
- 6 新造院一所、屋裏郷の中にあり。郡家の東北二十一里一百二十歩なり。層塔を建立つ。僧一、一級あり。前の少領額田部臣押嶋が造る所なり。今の少領伊去美が従兄弟なり。
- 7 新造院一所、斐伊郷の中にあり。郡家の東北一里なり。嚴堂を建立つ。尼二、一級あり。斐伊郷の人、樋伊の支知麻呂が造る所なり。

(一校注出雲国風土記より)

には山が迫っているなど広大な敷地を持っている訳ではありません。

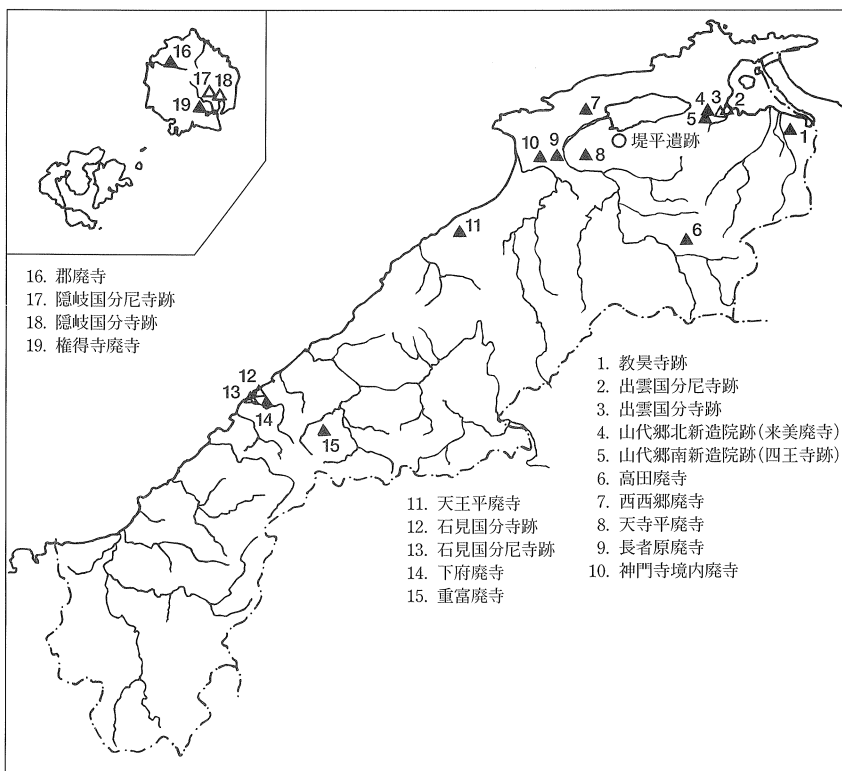
古代寺院の多くは、金堂、塔などの主要な建物配置が決まっており、四天王寺式伽藍配置とか法隆寺式伽藍配置と言う呼ばれ方をすることがありますが、来美廃寺の場合はそうした決まった伽藍配置に則った配置を取っていません。『出雲国風土記』に〇〇寺ではなく新造院と書かれた理由は、もしかすると決まった配置を取らない小規模な施設と言う意味かもしれません。このような特徴は来美廃寺だけに見られる事ではなく、三重県の夏美廃寺などでも同様ですし、壁画で有名な鳥取県の上淀廃寺も変則的な伽藍配置となっています。日本で初めて仏教寺院が建てられて以来、寺の施設配置には、ある程度の約束事があったと思われませんが、そうした約束事が少しずつ変容してきたのが7世紀の終わり頃であったと思われま

す。来美廃寺の他にも瓦出土地や部分的な発掘調査が行われた遺跡がいくつ知られています。それらから考えると、出雲地方では鳥取県内にわずかに遅れる7世紀末頃から古代寺院の造営が本格化し、8世紀前半代を中心に多くの古代寺院が建てられたものと考えられます。

### (3) 鳥根の古代寺院

鳥根県内において、瓦を出土する、古代寺院と考えられている遺跡は、約20カ所にのぼります。出雲部を除くと、石見国府や隠岐国府が置かれた浜田市や西郷町周辺に集中して見られます。その一方で、鳥前地域や益田市周辺では古代寺院が知られていません。これをもつ

て古代寺院がこの地域に無かったかと言うと、必ずしもそうとは言えず、島前の海士町には古瓦の出土地が知られていますし、益田市では瓦を焼いた窯跡の発掘調査が行われています。未発見の古代寺院は、まだ多くあるものと思われ、奈良時代の前半には、県内各地で巨大な寺院を見ることが出来たものと想像されます。



第6図 県内の主な古代寺院遺跡

#### (4) 風土記の時代の宍道町

現在の宍道町は、出雲国府の置かれた意宇郡お う ぐんの西の端（一部が出雲郡に掛かります）に当たります。『出雲国風土記』に見られる宍道町には、交通・通信の拠点施設である駅家うまやが置かれており、松江道路や山陰道の交差する現在の宍道町と同じように交通の要衝であったことがうかがえます。風土記の記述からは、現在の来待地区が玉湯町の一部とともに意宇郡はやし拝師郷、宍道地区が意宇郡宍道郷ししじのうまやと宍道駅、佐々布地区の一部が出雲郡たけるべ健部郷に含まれます。宍道駅家は山陰道の施設で、役人が宿泊するための館や馬房が置かれていたはずですが、遺跡としては判っていません。

宍道町内のこの時代の遺跡としては、佐々布の萩田遺跡や荒畑遺跡が知られています。萩田遺跡は鍛冶炉を持つ集落遺跡で、奈良時代の鉄生産に関わる遺跡と考えられています。この遺跡の特徴的な点については、後に詳しく述べますが、この遺跡からも仏教に関わる可能性のある土器が出土しています。

奈良時代の次の平安時代になると、西来待に小松古窯跡群が造られます。小松古窯跡群は須恵器を生産した窯跡で、萩田遺跡と共に、宍道町域で手工業生産が活発に行われていたことを示しています。

### (5) 古墳時代の宍道町

風土記の書かれた時代以前の、古墳時代の宍道町は、各地の様々な影響が顕著に見られる地域とすることが出来るでしょう。

古墳時代前期には、佐々布の国道54号線を見下ろす丘陵上に、長径約40mの楕円形墳、上野1号墳が造られていました。上野1号墳は全長約7mもの木棺を備え、銅鏡や勾玉など豊富な副葬品を持つ古墳でした。出雲地方では古墳時代が始まって以来、四角い形の古墳を造り続けていましたが、この上野1号墳は、最古級の丸い古墳となります。県内最古級の埴輪を始め、関西地方との交流によって、築かれたものと想像されます。宍道町域は、すでに古墳時代前期から交通・交流の拠点となっていたことが伺えます。

古墳時代も後期になると出雲地方の古墳にも独自の変化が見られるようになります。松江市を中心に見られる古墳の横穴式石室には、「石棺式石室」と呼ばれる特徴的な石室を備えることが知られています。多くの石を積み重ねて造るのではなく、凝灰岩を丁寧に切った石を組み合わせて、天井までも屋根形にくり抜いて造る石室です。この時代の出雲市を中心とする地域では、多くの石を積み重ねた通常の横穴式石室を造っていますので、ある地域の横穴式石室の構造を見れば、どちらの勢力に近いかが想像できる訳です。宍道町の横穴式石室では、鏡北廻古墳や下の空古墳、伊賀見1号墳に見られるように、石棺式石室の影響を強く受けたものが多く、後に国府が置かれることになる松江市の勢力と密接な関係があるようです。



当時の様子を示す遺跡には、横穴墓もあります。横穴墓とは、斜面に横穴を掘って遺体を納める部屋を造る古墳時代後期の墓の一種ですが、横穴式石室と同様に、松江市や安来市で見られるものと、出雲地域で見られるものの形態が異なっていることが知られています。宍道町は、この両者が混在する地域となっており、宍道町付近が東西の両勢力の境界線上となっていたかのようです。

次の奈良時代になると、出雲国は9の郡に分けられます。宍道町の大半は、松江市南部から安来市までの意宇郡に含まれ、宍道町の西側の一部が出雲郡に含まれています。こうした地域割りは、古墳や横穴墓に見られる状況に近いものがあり、古墳時代の勢力範囲を郡の区割りに当てはめたと想像されます。松江市南部の勢力は、宍道町付近を境界として意識していた可能性があります。境界とは、あらゆるものが出入りする場所であることから、宗教施設やまじないの場が置かれることが多く、堤平遺跡の寺(?)がこの場所に建てられた訳も、その辺にあるのかもしれませんが。

## 4. 新しい寺が造られる

### (1) 山林修行と山寺

瓦を葺いた巨大な建物群が当時の仏教寺院の一般的な姿ではありましたが、こうした古代寺院を建てた人物はどのような人だったのでしょうか。『出雲国風土記』に記された新造院の造立者は郡司（郡の役人）層が多く見られ、ある程度の地位にある人々が寺院を建てたことが判ります。また、仏像や瓦などに彫られた文字を読むと「父母のため」であるとか、「病氣平癒」など、ごく身近な願いによって作られていることがうかがえます。寺に関しても地域の有力者が、仏教による一族の繁栄を願ったり、寺を建てることによる私有財産の確保を狙うと言った経済的理由によっても建てる理由があったのではと想像させる例もあります。ところが奈良時代も中頃になると、それらとは異なる施設が造られ始めるようです。その施設では、建物は1棟か、多くても数棟しかなく、瓦を葺いた建物や礎石建ちの建物は存在しませんが、灯明の痕跡を残す土器や鉄鉢形土器、銅製品など仏教に関わる遺物を多く持っています。明らかに仏教に関わる施設ではありますが、「有力者の造立」と言った側面が感じられません。

平安時代に書かれた『日本靈異記』<sup>にはんりょうい き</sup>と言う仏教説話集には、「寺」の他に「堂」などと呼ばれる施設が登場します。文脈から仏教施設であることは間違いのないのですが、「寺」とは厳密に書き分けられており、比較的小規模の施設を指しているようです。これがどのようなものであったかははっきりとは判りませんが、当時から盛んになってい

った山林修行のための小規模な寺のような施設と考えることができます。奈良時代には、仏教は国を守るためのものと言う考え方が、中央政府の中で支配的であり、時には一般への布教活動や山林修行自体が禁止されたりもしました。わざわざ禁止されるぐらいですから、一般的に行われていた可能性があります。

では、こうした施設が遺跡として確認された例は、いったいどのくらいあるのでしょうか。千葉県などでは「村落内寺院」とも呼ばれ、仏教関係の遺物を出土する遺跡が数多く知られています。村落内寺院の名称や性格に関しては、近年論議がありますが、奈良時代後半以降の仏具を出土する遺跡が数多く存在することを紹介された地域です。また、石川県を中心とする北陸地方では、「山寺」「里の寺」などと呼ばれる、瓦のない仏教に関わる施設が多く知られています。これらの施設を見てみると、土器作り・金属器生産など手工業生産の工房などに隣接する小規模なもの、山中に単独で造られる比較的規模の大きなものがあることがわかります。北陸地方でのこうした施設からは、<sup>ほくしょどき</sup>「墨書土器」を始めとする文字資料が多く発見されており、そうした施設の多くが、当時から「寺」と呼ばれていたことが明らかになっています。山中に単独で建てられた比較的規模の大きな山寺は、当時から盛んになりつつあった山林修行のセンターとして機能していたと想像されています。当時の仏教僧は、俗世間から離れた山林で修行することによって奇跡的な力（＝法力？）を得、里でその力を使い切ってしまうと、また山林修行によって衰えた力を回復すると考えられてい

たようです。彼等の法力を信じる有力者にとっては、山林修行に入った後、どこに行ってしまうか判らない僧を管理するのは重要な問題だったので、有力者は山林修行のためのセンター、つまり山寺を整備したと考えている研究者がいます。

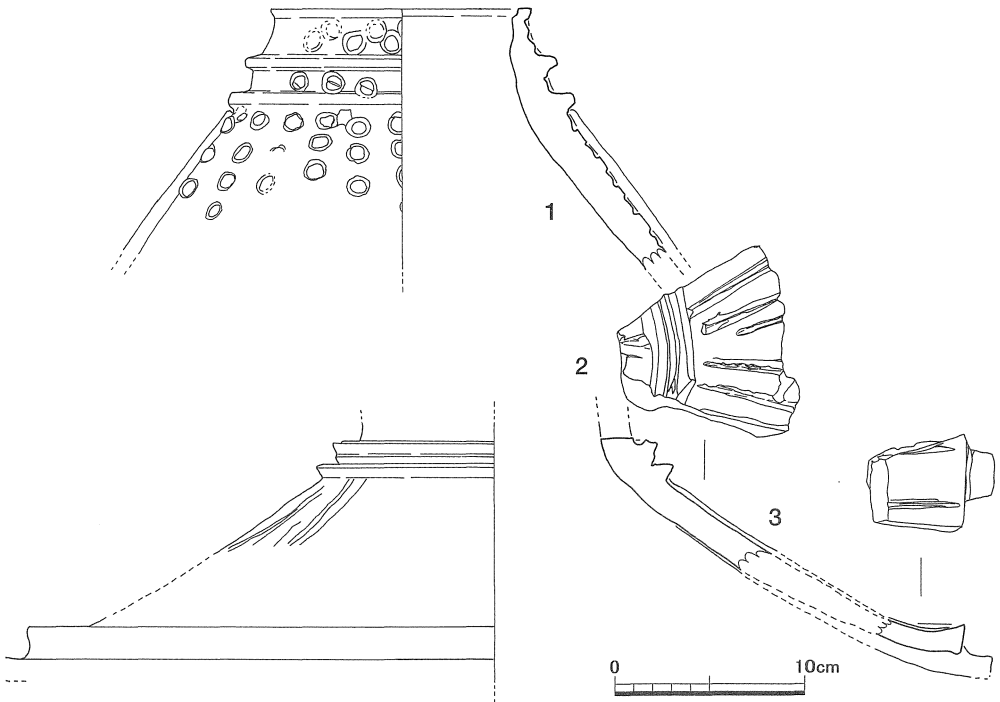
## (2) 県内での瓦を使用しない仏教関係の遺跡

島根県内でも、瓦のない仏教関係の遺跡と考えられるものが、近年になって増えてきました。

オノ神遺跡（安来市）は、集落から離れた標高約60mの狭い尾根上と、その下の狭い谷に立地しています。複数の小さな平坦面に少数の掘建柱建物を建てた施設で、堤平遺跡などと同様の須恵器灯明皿や鉄鉢形土器を出土しています。この遺跡から出土した最も特徴的な遺物は円形の瓦塔（陶製の小型の塔：29ページ）です。瓦塔と言うのは土器と同じように粘土で形を作って焼いて仕上げた小型の塔のことです。東日本では五層の塔などをモデルに組み物や瓦まで精巧に表現した瓦塔が多く知られていますが、なぜか西日本には平面円形の瓦塔が多く知られています。お寺での塔は、お釈迦様そのものを意味しますので、オノ神遺跡では、この円形瓦塔を中心的に奉っていたものと想像されます。オノ神遺跡は奈良時代後半頃に建てられて、平安時代中頃まで存続したようです。



オノ神遺跡の円形瓦塔



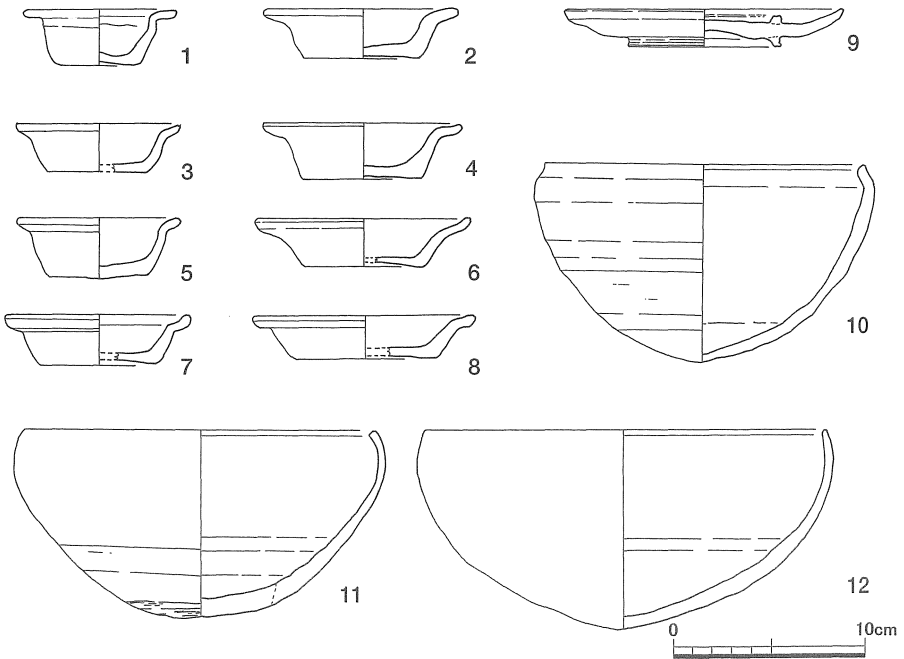
第7図 オノ神遺跡出土瓦塔 (S=1:4)

出雲市の三田谷<sup>さんただに</sup>I遺跡は、縄文時代の丸木船から中世の集落までが重なって発見された遺跡で、付近には、県内最大級の大横穴墓群や戦国時代の山城跡もある、遺跡の密集地帯でした。この内、奈良時代の遺跡からは、「高岸郷」と書かれた木簡が出土したり、倉庫群と考えられる多くの建物跡を始め、硯など役所の仕事に関わる遺物が多く見られます。こうしたことから、この遺跡は、役所（郡衙<sup>ぐんが</sup>）の出先機関？と考えられています。この遺跡の一画を通る溝からは、奈良～平安時代の土器類が集中して出土していますが、中には鉄鉢形土器や灯明皿型須恵器が多数含まれています。第8図の1～8が灯明皿形須恵器ですが、堤平遺跡のものよりも、深く小さいものも多く見られ、生産地が異なる可能性があります。また、9は托（たく：現代の茶托と同様に容器の下に置く台）で、県内では珍しい土器で、県外の遺跡では古代寺院に多く見ることが出来るものです。これらの遺物は溝に捨てられた状態で発見されたもので、建物に直接伴う訳ではありませんが、役所関連施設の一画にお寺のような施設が含まれ、僧が活動する場所が存在したようです。ところで、三田谷I遺跡からは、「真名井（神聖な水の出る所）」と書かれた墨書土器も出土しています。「真名井」は神道に深く関わりと考えられることから、神社関連の施設も置かれていた可能性があります。古代の役所の出先機関にいったいどのような機能があったかは判りませんが、施設群の一画には、様々な施設が置かれていたようです。





三田谷 I 遺跡出土土器

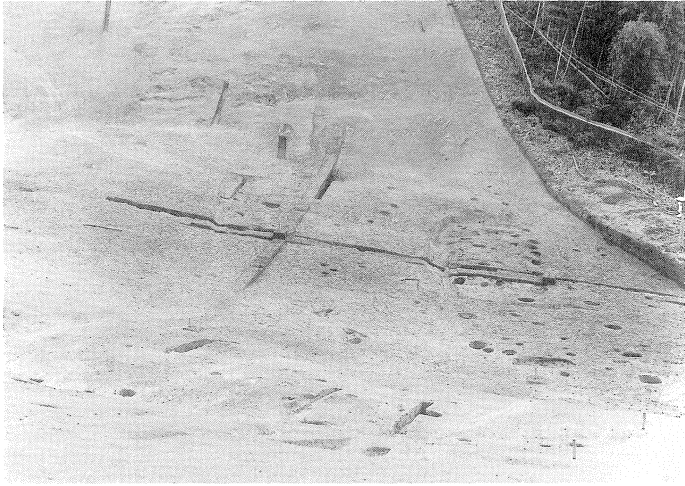


第 8 図 三田谷 I 遺跡出土土器 (S=1:4)

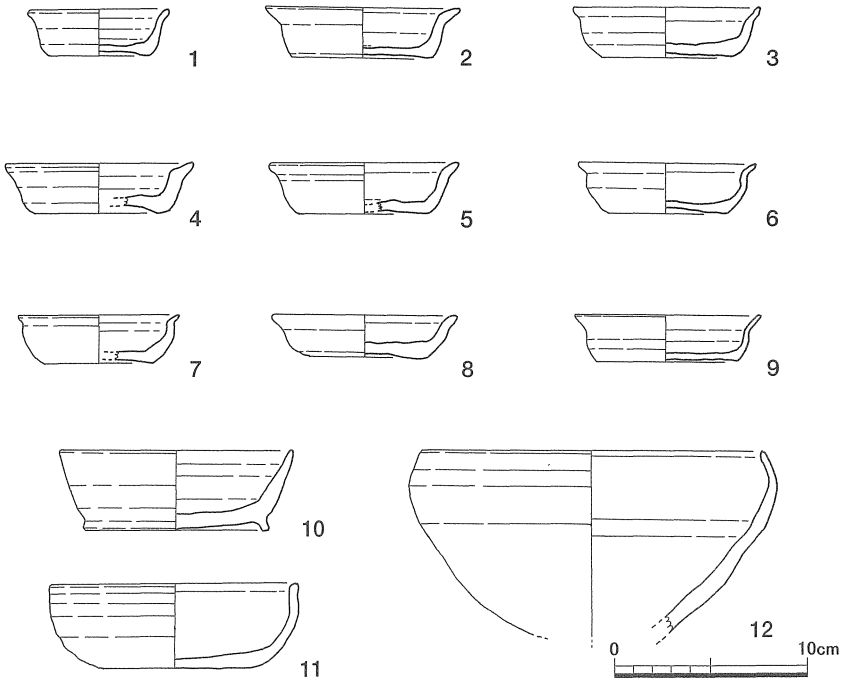
東出雲町の島田池遺跡しまだいけは30穴を越える大横穴墓群として知られています。遺跡の西側には出雲国府や出雲国分寺が建てられる意宇平野おうが広がる立地で、横穴墓の中には非常に多くの副葬品を備えたものや家型石棺を納めたものもあり、7世紀の初めには付近に有力者がいたものと想像されます。この遺跡の一画に、灯明皿型土器や鉄鉢形土器を多く出土する谷がありました。遺跡としては意宇平野の隣接地にあると言うことを説明しましたが、灯明皿形土器などを出土する場所は南に開く小さな谷で、意宇平野からはもちろん、周辺地域からも見通すことはできません。

谷の中程には帯状の平坦面が造成され、小さな掘建柱建物が3棟程度建てられていたようです。この谷に造られた施設は奈良時代の中頃に成立し、平安時代前半のうちには消滅しますが、この谷の上の尾根にはさらに中世まで続く仏堂が建てられていたようです。

このような遺跡が、島根県内で最初に注意されたのは益田市の根ノ木田遺跡・大益遺跡での発掘調査です。1989～1991年に行われた石見空港建設に伴う発掘調査で鉄鉢形土器が出土したことによって、その存在が想定されるようになりました。建物跡などは確認できませんでしたが、北陸地方で山寺が確認され始めた頃の調査で、こうした現象が北陸地方特有のものでなく、同様のものが全国にある可能性を指摘することになりました。さらにそれ以前の1979年には六日市町のまえたてやま前立山遺跡で、大型の掘建柱建物が調査され、この遺跡から「寺」と



鳥田池遺跡の建物跡



第9図 鳥田池遺跡8区出土土器 (S=1:4)

書かれたヘラ書き土器が出土していたのです。前立山遺跡の寺は、奈良時代の後の平安時代のもと考えられます。

最近の調査では、銅鐸や四隅突出型墳丘墓の発見で話題となった青木遺跡（出雲市）でも「新寺」と書かれた墨書土器が出土しています。調査中のため遺跡の詳細は明らかではありませんが、大量の墨書土器や木簡などの文字資料が、役所関連施設の存在を想像させるほか、まじないに関する遺物も多く出土しています。青木遺跡でのこうした資料は平安時代初め頃を中心とする時期と考えられます。出雲市の大井谷Ⅱ遺跡も、この頃の寺跡と考えられるもので、現存する寺の前身となる可能性も高く、中世に至るまでの多くの遺物を出土しています。

以上に見てきたように、奈良時代後半になってから建てられ始める、仏教に関係する瓦を持たない遺跡は意外に多く見られます。これらはいずれも礎石建物や瓦葺き建物を伴わず、奈良時代後半になって出現すると言った共通点が見られますが、山間の小規模な施設であったり、役所関連施設の一角であったりと、さまざまな特徴があるようです。それを大まかに整理してみると、概ね次の3つに分けられます。

- ① オノ神遺跡に見られるように集落から離れた山中に立地する比較的規模の小さいもの。
- ② 三田谷Ⅰ遺跡のように役所に関連した施設や工房・集落などの一画に建てられるもの。青木遺跡もこれに含まれる可能性がある。
- ③ 島田池遺跡のように平野に近いところにある、やや規模の大きいもの。

堤平遺跡は、平野からも遠くなく、大きな平坦面を造成した規模の大きなもので、③の分類に含まれるものです。ただ、この③の分類に含まれるものには平野に直接面したものではありません。いずれの場合も小さな谷奥に立地し、周囲を丘陵に囲まれ、あたかも日常生活からは隔絶されているかのような場所に造られているのです。

では、堤平遺跡の寺(?)を造ったのはいったいどんな集団だったのでしょう。多くの遺跡が建物数棟分の必要最低限の造成を行って建物を建てているのに対し、堤平遺跡では岩山を切り崩した大きな平坦面を造成し、布堀り建物などを建てています。こうした大規模な造成が出来るのは、よほどの有力者なのでしょう。

堤平遺跡は、出雲の中心である意宇郡の西の境界に位置する一方、宍道駅に隣接する利便性の良さがあり、大規模な造成工事を行っている点などから、意宇郡と言った公的な力で建てられた可能性までも想像してしまいます。

### (3) 荻田遺跡

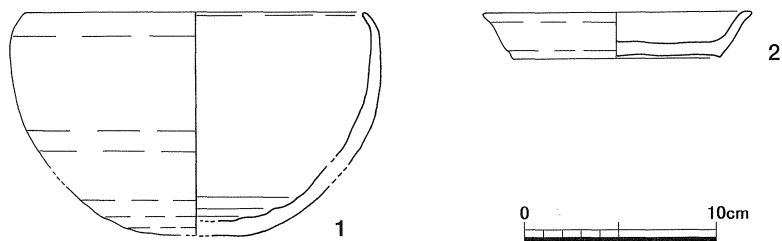
宍道町域で発見された奈良時代の重要な遺跡に、佐々布の荻田遺跡があります。現在の荻田団地が造られている場所は、昭和48年(1973年)に発掘調査が行われ、奈良時代を中心とした集落が発見されました。

荻田遺跡では、東向きの緩やかな斜面を階段状に造成し、多くの建物が建てられていたようです。遺跡から出土するものの中にはふいご

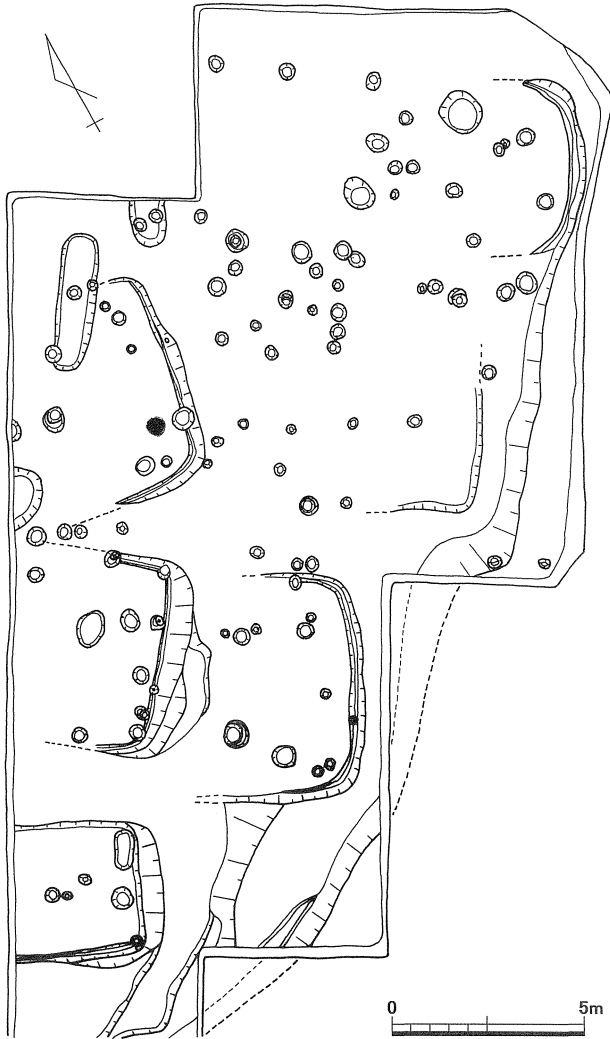
の羽口が含まれていました。鉄素材を鉄製品に加工する鍛冶を行うときに炉に空気を送り込む管の先端部で、このことから萩田遺跡の集落で鍛冶が行われていたことが判ります。さらに興味深い遺物に第10図に示したものがあります。1も2も、堤平遺跡で出土したものと同様の鉄鉢形土器・灯明皿型土器、つまり仏具として使われるものが含まれているのです。

鉄鉢形土器や灯明皿型土器の出土量はわずかで、遺跡全体から見れば、それほど特別な施設はなく、「鍛冶を行っている集落であった」と言う以上の様相は伺えませんが、実際に出土している仏教関係の土器は、いったい何を意味しているのでしょうか。

奈良時代には僧尼令と言う法律により、僧が寺を出て一般に布教することを禁じていた時期がありましたが、僧尼令を破って里で一般に布教活動を行っていた僧も多くいたことと考えられます。萩田遺跡で出土する仏教関係の土器は、こうした僧の活動の痕跡を示したものと思われる。



第10図 萩田遺跡出土土器



第11図 萩田遺跡遺構配置図 (S = 1 : 200)

ところで、こうした僧は荻田遺跡のどこに仏教関係の土器を持ち込んだのでしょうか。北陸地方では、須恵器を焼く工房群や役所関連施設の一画から「寺」と書かれた墨書土器が出土することが知られており、こうした施設群の一角にも寺のような施設が置かれていたと考えられています。島根県内の遺跡で、「寺」と書かれる文字資料が出土することはまれですが、そうした遺跡は島根県内でも存在したことと思われれます。荻田遺跡では、鉄生産に関わる集落の一画に、小さな仏堂が置かれていたことが想像されるのです。

堤平遺跡の寺や荻田遺跡の仏堂が建てられるようになるのは、いずれも奈良時代後半以降のことで、巨大な古代寺院が建てられ続いていた奈良時代前半以前には見られなかった現象です。

#### (4) まとめにかえて

奈良時代の後半には集落や工房に仏堂が置かれたり、瓦を葺かない新しいタイプの寺が出現したり、様々な変化が現れてきたことを、堤平遺跡や荻田遺跡から見てきました。では、このような変化なぜ起こったのでしょうか。県内の遺跡からは、このような変化が仏教関係だけではないことを物語っています。例えば、古墳時代から続く出雲の須恵器生産は、大井古窯跡群（松江市）に限られていたと考えられます。ところが、奈良時代の後半を過ぎると、湯峠窯跡（松江市か玉湯町）や小松古窯跡群など新しい窯が造られ、生産地が拡大すると言った現象が見られます。また、古墳時代以来莫大な生産を行っていた玉生産



は、勾玉・管玉と言った古墳時代の伝統的な玉生産を止め、水晶製を中心とした平玉・丸玉など新しい玉を玉湯町周辺と出雲国府内だけで作り始めています。奈良時代は手工業生産を始めとした産業構造が大きく変化する時期と考えられるのです。

奈良時代は、全国的に見ても、特に仏教の側面から大きな変化があったようです。724年に即位した聖武天皇は病弱だったと伝えられています。特に仏教を奨励した人物として知られています。東大寺に大仏を建立したり、全国の国毎に国分寺・国分尼寺を建てさせました。こうした活発な仏教政策の一方で、次々と都を遷都した事も伝えられています。全国規模で公共事業(?)を推進した聖武天皇の政策は、もしかすると経済政策としての側面もあったのではないのでしょうか。

この時代に活躍したもう一人の人物に行基という僧がいます。当時、僧が寺を出て、一般に布教することは禁止されていたこともありますが、行基は積極的に布教活動を行い、当時の政府からは弾圧を受けます。それでも行基とその集団は、寺を造り、堤を築き、橋を架けるなど数々の土木事業を行って貧しい人々を救済してきました。僧尼令などの法律に違反するとして弾圧を繰り返してきた当時の政府も、最終的には認めざるを得ないほどの活動をしてきたわけです。

ところで、こうした歴史に描かれているのは、主に都とその周辺での出来事ですが、このような動きが地方においても無関係であったはずがありません。国分寺・国分尼寺と言った巨大寺院の建立は地方の経済にも大きな影響を与えたはずですし、行基等の活動に刺激を受け

た人は数多くいたはずで、大型公共事業（国分寺の建立など）を支えるため、手工業生産（須恵器づくりなど）は活発化し、さまざまな産物の生産地が拡大して、多く情報を伝える必要が生じ、多くの人々の活動が活発化したものと考えられます。山林修行や一般民衆への布教活動の本格化など仏教自体の変化に加え、産業構造の変化が新しい寺を造らせる原動力となったのではないのでしょうか。

奈良時代後半の出雲地方では、見せることも意識した巨大建築である古代寺院の造営は一段落しました。それに代わって、山林修行僧や一般の人々までもが参加した新しい寺が次々と建てられ、また、様々な手工業生産の場でも小さな仏堂が祀られると言った現象が各地で見られるようになってきた事でしょう。

島根県内において、奈良時代前期以前に建てられた瓦を持つ古代寺院が無くなって以降、現在まで法灯を伝える古刹との間を埋めるこのような遺跡の存在は、長い間知られていませんでした。しかし、堤平遺跡に建てられた寺の存在は、出雲国分寺などの古代寺院と同時期に成立し、現代まで続く寺との間を埋める資料になりそうです。更に、これらの遺跡が語る歴史は、山林修行や一般への布教と言った仏教そのもの変化に加え、奈良時代に起こった様々な変化までもを雄弁に語っているようです。

宍道町最古の寺である堤平遺跡や萩田遺跡などの宍道町内の遺跡から垣間見られる大きな変化は、日本の奈良時代から平安時代、そして中世への変化そのものと見て取れるのです。

## おわりに

本書は、島根県埋蔵文化財調査センター発行の埋蔵文化財発掘調査報告書「堤平遺跡」などを参考に作成しましたが、遺構の評価や個々の年代観は林健亮の個人的な見解です。よって、島根県埋蔵文化財調査センターの見解とは異なる場合もあります。

本書を作成するに当たって島根県埋蔵文化財調査センターより資料の提供等で多くの御協力をいただきました。

本書に掲載した写真・図版のうち、林健亮が撮影・作成したものを以外に、下記文献より転載しました。

### 図版・写真出典

『堤平遺跡』島根県教育委員会 2002年

『オノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷Ⅰ遺跡』島根県教育委員会 1995年

『島田池遺跡、鶴貫遺跡』島根県教育委員会 1997年

西尾克己他「出土品から見た萩田遺跡の性格」『宍道町歴史叢書三』宍道町教育委員会 1998年

『来美廃寺』島根県教育委員会 2002年

『島根県埋蔵文化財調査報告書Ⅻ』島根県教育委員会 1986年

本書の作成に当たり、下記文献を参考にしました。

須田勉「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢Ⅱ』1985年

石田広美他『千葉県文化財センター研究紀要18』財団法人千葉県文化財センター 1997年

松山和彦「北陸における古代寺院の一様相」『越前・明寺山廃寺』福井県清水町教育委員会 1998年

久保智康「北陸の山岳寺院」『考古学ジャーナルNo382』1994年

## 著 者 紹 介

林 健亮（はやし けんすけ）

1964年12月1日生まれ

1988年 別府大学文学部史学科卒業

現 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 調査第3係長

宍道町ふるさと文庫18

宍道町にはじめてお寺が建てられた頃  
謎のお寺？堤平遺跡を探る

2003年3月31日 第一版発行

編 著 林 健 亮

発 行 宍道町菟古館

八東郡宍道町大字昭和1番地

印 刷 柏木印刷株式会社

松江市国屋町452-2

